



緑爽会報 NO.111

12年 9月25日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

風立ちぬ、いざ生かめやも

この会報ができる頃、9月山行「小檜山」が実施されているはず。どうか高原に涼風が吹き渡っていますように。楽しい秋の山旅を祈ります。なお、報告や写真は次号に掲載の予定です。

# 「心に映る山々」

第20回 日本山岳会  
アルパインフォトクラブ写真展



【夏山・嶺岳、立山遠望】羽田榮治

日時 平成24年10月4日(木)～10月10日(水) 入場無料  
10:00a.m.～6:00p.m. (最終日は2:00p.m.まで)  
会場 ポートレートギャラリー・日本写真会館5F  
事務局 日本山岳会内・アルパインフォトクラブ <http://www.japvc.fuji.to/>  
〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 ☎03-3261-4433 FAX03-3261-4441

主催 日本山岳会・アルパインフォトクラブ  
後援 日本山岳会資料映像委員会  
日本山岳写真協会

## 【鼎談】

### 深田久彌を語る

山を愛し、文学を愛し、人々から愛され親しまれた深田久彌の素顔を語ります。

とき 10月4日(木) 18:30～

ところ 日本山岳会104号室

講師 深田森太郎 (久彌長男・緑爽会々員)

藤本 慶光 (前副会長)

大森 久雄 (編集者)

どなたでも参加できます。知人・友人をお誘いください。問合せ 03-3326-2892 松本



山田旅館前庭でくつろぐ深田久彌 (昭和32年) 【小谷温泉賛歌】より

## 「緑爽会講演原稿」

日本山岳会々員

### 棟方志功と立山

五十嶋 一晃



善知鳥版画巻より「責苦の欄」

棟方志功については、既に彼の作品や人柄に関する多くの作品集、文献、資料があります。

しかし、「棟方志功の山」を語る人は無に等しい状況であります。棟方作品の常設展示館である富山の福光美術館々長ですら、棟方が日本山岳会の会員であったことは初耳であったと言います。館長は「棟方の山」を、ほとんど知りませんでした。

そこで今日は、今まで述べられていなかった「棟方志功の山」と、あまり語られていない「富山福光疎開時代」、つまり日本山岳会富山支部会員時代を中心にお話しいたします。

なお、本日のレクチャーの核心部分は、近く発行予定の『山岳』に掲載される論考と重複する部分がありますので、ご了解ください。

一、立山地獄説話が立山と棟方の郷里・青森を結ぶ

棟方志功は富山、特に立山となぜ結びついたのであろうか。それは能の「善知鳥」(うとこと)が原点であります。棟方は第2次大戦中に富山県福光町に疎開しました。1945(昭和20)年4月に移住し、それから6年8ヶ月の間、福光で過ごします。なぜ富山を疎開先に選んだのか。一般的には「富山の民芸関係の人たちの誘いがあったから」と言われております。棟方は、福光へ疎開する以前から立山に登っており、その山行に同行したのは日本山岳会々員であり、民芸運動を行っていた大間知邦太郎でした。たしかに民芸関係ではありますが、この福光を選

んだ動機について、もう少し掘り下げてみたいと思います。

棟方の自著『板道楽』や評論など、数多い文献を整理しますと、その理由は次の5点に集約されます。

一つは、故郷の青森に、いまだ成功していないという醜さをさらしたくない、と考えていたところに、民芸関係で福光町光徳寺の高坂貫昭師と女医の松井寿美子の誘いがあったことでもあります。この時、棟方41歳。

二つ目に、このころの棟方は出世願望が強く、1938(昭和13)年の文展に「善知鳥版画卷」で特選を受賞していますが、この程度では錦を飾ったとは言えないので、青森へは帰りたいしなかった。

三つ目に、よく当たる相学の研究者から青森の方角は良(ごん 丑寅うしとら)で凶と言われた。

四つ目に、親子6人の生活を考えれば、米どころ福光からの誘いが大きなキツカケになった。五つ目に、作品「善知鳥版画卷」との縁であります。

福光美術館々長・奥野達夫氏は、「棟方が太平洋戦争の疎開先に富山を選んだ本当の理由は、立山への畏敬の念が一番の動機であると思う。

富山で最も心を寄せたのは立山であろう。特に地獄谷は棟方にとって関心が強かった。それは能の善知鳥が原点である」と指摘しております。

謡曲「善知鳥」のあらすじは、舞台の前半、つまり前(マエ)の場面は、越中の国、立山であります。諸国を旅する修行僧が、陸奥の外ヶ浜(謡曲では外の浜)へ行く途中、越中の立山に立ち寄ります。立山の霊場に着いた僧の目前には、地獄さながらの風景があり、その恐ろしさに慄きながら下山を始めると、一人の老人に出会います。老人は「私は外の浜の狸師をしていた者で、去年の秋に死にました。陸奥へ行くのであれば外の浜の狸師の家を訪れて、妻子に



立山曼陀羅 吉祥坊本 (善知鳥) 片袖幽霊譚の場面 (個人所蔵)

蓑と笠を手向けるように伝えて欲しい」と頼みます。そして証として老人は、自分が着ていた麻衣(まえ・麻の衣)の片袖をちぎって僧に渡し、僧が立ち去るのを見送りつつ姿を消します。

後(ノチ)の場面では、僧は外の浜の猟師の家を訪ね、妻子に老人の伝言を語ります。猟師の妻は、驚きつつ亡夫の形見の衣を取り出し、僧が預かった片袖を合わせてみると、ぴたりと重なった。やがて僧が蓑と笠を手向けて死者のために仏事を営み、冥福を祈ると猟師の霊が現れる。亡霊は、後世の報いも忘れて殺生に明け暮れた在りし日を語り、鳥の中でも親子の情愛が深いと言われる善知鳥ばかりを殺した罪を懺悔します。冥土で化鳥となった善知鳥に追いかければ、地獄の責め苦を受ける有様を見せ、どうか自分を助けて欲しいと僧に卑いを頼みつつ亡霊は消える、というストーリーであります。

「外ヶ浜」とは、陸奥湾に面した地域、青森市と東津軽郡一帯の古称であります。青森市の江戸時代は「善知鳥村」という寒村であったようです。青森市にある善知鳥神社の門前で生まれた棟方は、「私は今でもこの名、善知鳥をそのまま善知鳥市でありたかった。青森市という

より善知鳥市の方がどんなにかこの街の名にふさわしいことか知れない」と言っています。善知鳥とは、東北や北海道の沿岸に生息する海鳥のことでもあります。

そこで、この能の基となった立山地獄思想とはどんなものでしょうか。1067(時歴じりやく3)年、天台宗の僧侶、鎮源(ちんげん)が比叡山に編纂した仏教説話集『大日本国法華験記』に、初めて立山の仏教の世界観が認められ、下巻第124「越中国立山女人伝」に地獄説話が登場します。

その後、1120(保安元)年代ごろに成立した編者不明の仏教説話集『今昔物語集』に立山地獄説話が登場します。

これらの説話集により、平安末期には貴族社会に「立山地獄説話」が知れ渡り、12世紀の『地獄草紙』などに見られる「鶏地獄」のモチーフや、津軽地方の「珍鳥説話」、「片袖幽霊譚」などが組み合わされ、室町時代に能の「善知鳥」が成立しました。作者は諸説あり、曲の成立についても未確定ですが、謡曲の初演は室町時代の1465(寛正6)年2月、將軍足利義政によりシテ観世(音阿弥)で上演されました。

以上のように、越中の立山と青森の外ヶ浜は、能の舞台でつながっていたのであります。

棟方が「善知鳥版画巻」を描くことになったキツカケは、民芸運動を起した柳宗悦の指示で、棟方の教育係のような立場にあった水谷良一(内閣統計局労働課長)が、能の「善知鳥」を版画にしてみないかと持ちかけたのが始まりであります。水谷は能を知らなかった棟方に、そのいろはからじつくりと説明しました。

棟方が能の幽玄の世界を理解したと見ると、実は「善知鳥」という謡曲がある。これは君の故郷、青森が舞台だ。「善知鳥」は修羅物の中でも凄惨で、烈しくしかも哀れな物語、しかも君

は、その名を冠した善知鳥神社の門前で生まれ育っている、と説明します。そのあと、水谷はやおら立ち上がって棟方の前で「善知鳥」の曲を謡い、かつ舞い始めました。

【冥土にしては、怪鳥となり罪人を遣ったて鉄(くろがね)の、嘴(はし)を鳴らし、羽を敲(たた)き銅(あかがね)の爪を研ぎ立てては……】

この模様を、「私の履歴書」(のちに『わたしはゴッホになる』と改題して出版)には、「水谷様の『善知鳥』の舞が続きます。名人に達した舞でした。すさまじく恐ろしく、烈しく哀しい舞でした。わたくしは、両手がワナワナとふるえて気が昂りました。コレダ、コレダと感嘆しました。舞が終わるとわたくしは、頭と手を畳につけて『では、さようなら』と言って駆け出しました。すつ飛ぶようにして水谷様のお宅を出、道々『善知鳥、善知鳥、善知鳥』と声を出して、駆けに駆けました。素晴らしい演出である。素晴らしい感動ぶりである」と書いています。帰宅して、食べるのも眠るのも忘れて彫りつづけ、31枚の板木から大作『善知鳥』の傑作が生まれたのでした。

この作品は、1938年(昭和13)年5月の日本民芸館での展示のあと、「善知鳥版画巻」から8図を選び、新たにカットにあたる三面六臂六足の像を一冊加えて、「勝鬘菩薩(しょうまんふ)、善知鳥版画曼荼羅」と題して10月の第2回新文展(文部省美術展覧会1936、1944年、そのあと日展となる)に出品、版画では文展・帝展を通じて官展初の特選を受賞します。棟方35歳です。

この新文展について、棟方は版画とは性格がまったく違う油絵の絵描きたちが審査するので、きちんとした判断が出来るはずもなく、特選どころか入選もおぼつかないと思っていました。この受賞によって棟方の名前が広く世に知られることになりました。

ることになりました。

## 二、「棟方志功の山」に取り組んだ経緯

奇妙なことの重なりによって、今回の棟方がまとまりましたので、ご協力いただいた方々への感謝の意を込めてここに披露します。

そもその始まりは、昨年の10月、松本恒廣さんから、緑爽会で「棟方志功の山」についてどなたかレクチャーを頼みたい、との依頼がありました。私自身は『日本山岳会百年史』の「会員 百年の推移」で、棟方志功を取り上げている程度のことでは知っておりませんが、それ以上の知識は持ち合わせておりません。

早速、日本山岳会の山田富山支部長などと相談します。支部長から旬日を過ぎて適任者が見つかからないと聞かされ、松本さんにその旨伝え、この件は済んだものと考えておりました。

ところが、昨年の12月はじめに突然、富山市の亀村兼介さんという方から電話が入り、その内容は「雄山神社峰本社建物は、江戸末期に立て替えてはいるが、それ以前の部材といわれる板に、棟方志功から「天地合掌之所」という墨書を揮毫していただいた。それを立山博物館に寄贈した」と言うのです。この「天地合掌之所」という至言に感動を覚えまして、棟方志功の登山について関心を持ち始めました。亀村氏からは、喜れも押し詰まった12月15日に、棟方が揮毫した時の模様や、立山博物館に寄贈当時の状況が書かれた手紙が届きます。

資料収集を重ねるうちに、棟方志功が福光町を疎開先に選んだのは、能の「善知鳥」との関係が原点であることを知りました。私の姪の大学の卒業論文は『能の形成——善知鳥』に見る能の独自性』で、その研究の一環として立山博物館の福江主任学芸員のところへ、姪と共に訪問して指導していただいたことがありました。その関係で、立山地獄説話の一つとして「善知鳥」には関心をもっておりました。

そこへ今年1月、私が務めていた会社の仲間が私の喜寿を肴に飲み会を行い、その中に能楽歴50年という後輩がおりまして、親善公演でカトマンズを訪れ、エベレストを遊覧した話などを聞くに及んで、「棟方と立山」について浅からぬ因縁があるような奇妙な感じを抱きました。これらのことが重なり合って棟方志功の山を調べてみたいという気持ちがふつふつと湧いてまいりました。棟方は立山には3回登っています。その折に、山で制作した作品を山小屋などに残していたことが判って、「棟方の山」をまとめてみたいという意欲が増幅しました。

本格的に調べ始めましたが、棟方の日本山岳会入会年月や会員番号の調査に1ヶ月かかり、なかなか本論に進めません。そこへ福光美術館々長から資料が届き、また山田富山支部長からは「この際、棟方志功の山をせひまとめて欲しい。そのためには協力を惜しまない」との言葉をいただきました。

そこで、本年2月6日、豪雪をつけて富山県南砺市(旧・福光町)の棟方志功常設展示館の一つである福光美術館と、棟方の疎開先住居であった愛染苑・鯉雨画斎(りうがさい)を訪れ、奥野達夫館長より懇切丁寧な説明を受けてまいりました。

富山支部の方々からも協力をいただき、一応論考の材料を書き連ねた原案をまとめました。これを日本山岳会の『山岳』の担当理事に電話で伝え、メールで草稿を送ったところ、『山岳』に掲載すべき内容であるという連絡があったのであります。

その後、4月23日、私は棟方の心象絵画であると「毛勝山」の油絵2枚を、自分の目で確かめたいと考えて、掲載してある魚津市役所と魚津駅へ出向いて、作品を拝見、その内容を一部追加したものを、今日の緑爽会と8月8日に富山支部で語ることにしております。

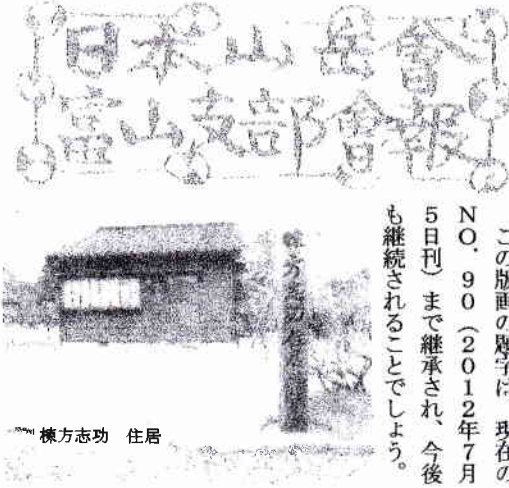
### 三、棟方は日本山岳会 富山支部会員

棟方志功は1944(昭和19)年1月、日本山岳会に入会し、1948(昭和23)年3月、富山支部発足と同時に支部の会員になっております。

「富山支部会報」第2号(1948年10月刊)の「会員通信」に棟方の手紙が載っております。「今般御会御主旨を受け、日本山岳会(この方には前々から会員になって居ります)支部御開部を祝します。よろしく入会をお許可くださいませ。その内富山に参上規定の会費その他を払込み致します。右 十日 富山県福光町 棟方志功」とあり、支部設立当初からの会員であることの証の一つになりました。

「富山支部報」の第1号は発足4ヶ月後の7月に発行されましたが、棟方はその会報に「日本山岳会 富山支部会報」と彫った版画を寄せております。その号の編集後記に若林啓之助は「この会報の表紙本版は芸術院会員で本会々員の棟方志功氏をわづらはし、わざわざ刻んでいただきました」と書いております。当時の棟方は芸術院会員ではありませんが、ほかに多くの美術関係の会員・役員を担っておりましたので、若林は間違えたのであります。

この版画の題字は、現在のNO.90(2012年7月5日刊)まで継承され、今後とも継続されることでしょう。



棟方志功 住居

棟方志功の日本山岳会入会年月、会員番号、推薦者2名、退会年月日の調査には1ヶ月を要しました。なにしろ戦中・戦後のことであり、作業は難渋しました。

調査にあたっては、富山支部の会報、富山支部名簿、日本山岳会百年史の「会員 百年の推移」、日本山岳会本部の会員名簿、第2次世界大戦終戦前後の『山岳』や日本山岳会の会報を丹念に調査・照合を行っております。

棟方志功が入会したのは戦時中であり、そのころ、1943(昭和18)年1月17日には『日本山岳会関係学徒出陣壮行会』が行われるなど、戦時体制が強力に進められ、翌年の5月7日に会長・木暮理太郎が逝去され、1945(昭和20)年5月27日には空襲によって虎ノ門事務所が焼失したことなど、戦中・戦後の混乱した状態が続いていた間に、多くの貴重な書類を失ってしまったようであり、調査の結果、棟方志功の入会年月は、1944年(昭和19)年1月(日本山岳会百年史)と1946(昭和21)年4月(1952・昭和27年版名簿)の二通りあり、会員番号は2317(日本山岳会本部)と2274(日本山岳会富山支部)の記録があります。そのほか、推薦者2名と退会年月は全く不明でありました。

正しくは入会が1944(昭和19)年1月で、会員番号は2317番であります。その根拠は、棟方が入会した後、終戦までの入会した人が5人おりますが、そのうち3人は法大山岳部出身で、私の先輩でありますので、当時の入会状況をよく聞いていたことと、入会年月および会員番号を確認しておりました。それと日本山岳会の「入会年月と会員番号の対応表」によります。

ちなみに会員番号2274番は、日本山岳会事務局の資料により「村瀬亮一 1943(昭和18)年11月入会」と記録されており、支部名の記録はありませんが、富山支部会

員であります。富山支部名簿でも確認しました。

さて、2名の入会推薦者については、日本山岳会では不明としておりますが、富山市総曲輪の大間知邦太郎と、富山市東四十(あいもの)町の中田勇吉であると思われます。

大間知邦太郎は1928(昭和3)年9月の入会で、会員番号1091番。棟方志功が3回立山に登っているうちの2回同行しております。大間知は日本山岳会々員であると同時に日本民芸会の会員でもあり、富山県の民芸運動の中核でもありました。棟方の疎開先を富山へ誘った人でもあることは、前述の通りです。二人は、陶芸家の河井寛次郎のところに入り入りしているうちに親交が生まれました。

もう一人の推薦者は、棟方の福光町での版画活動を支えた北陸銀行頭取の中田勇吉であると思われ。中田は棟方が入会する2年前の1942(昭和17)年2月に入会、会員番号2182番。民芸活動の支援者でした。富山支部発足時には東京在住で参加しませんでした。1952(昭和27)年4月より1957(昭和32)年3月までの5年間、3代目の富山支部長を務め、さらに1960(昭和35)年4月より1983(昭和58)年3月までの13年間にわたり5代目の支部長として富山県の登山活動に貢献しております。

棟方の退会年月は定かではありません。日本山岳会の名簿1952(昭和27)年版には載っており、1957年版(1958・昭和33年3月末日現在、及びそれ以降の名簿には記載されておられません。棟方が福光町から東京へ戻ったのは1951(昭和26)年11月であり、富山支部を離れた一年後ぐらいに退会したものと推測されます。以下略(文責 編集部) ★掲載はごく一部、それも省略したものです。続きは、近く発行される『山岳』をお楽しみに。



文化勲章を授賞した棟方志功 1970 (昭和45)年

### 思い出すこと——近藤 緑

五十嶋さんの労作「棟方志功と立山」を編集して、私には思い出すことがあった。あれは昭和27年、文化学院に通い始めた私は、教室で一組の母子をよく見かけた。棟方志功という版画家の奥さんと娘さんだということだった。年表によれば、富山から東京に戻った翌年のことである。結婚後は、夫の勤務する出版社で、棟方志功の装丁する本が多く出た。中でも晩年の谷崎潤一郎作品が目立った。棟方志功とはどんな人だったのだろう。たまたま童話『われは日本の「ゴッホ」になる』(西木鶏介作・斎藤博之絵 佼成出版社刊)が手元にあるのを思い出して、読んでみた。

志功は青森の善知鳥神社の前で生まれた。家は鍛冶屋だった。父親は腕のいい職人だったが、酒飲みで気ままな人であった。そのため志功は、小学校を出ると兄と一緒に鍛冶屋を手伝った。彼はひどい近眼だったが、子どものころから絵がうま<sup>く</sup>、「ねぶた祭り」の武者絵では評判を呼んだ。

ゴッホのひまわりの絵に魅せられて、絵を描く仲間と付き合うようになるが、やがて油画は所詮西洋のもの、版画こそが日本で生まれたものと考えて版面の道を志す。「帝展に入選するまでは帰るな」と言われて上京。貧乏時代の志功を支えたのが後に妻となった千歳子だった。「日本のゴッホ」を目指した志功だったが、最後には「世界の棟方」となったというお話し 手軽な紹介ながら参考迄。

知れば知るほど恐ろしい

### 「原発事故」を考える

鎌倉 淑子

#### DVD と本の紹介

- ・DVD
  - \* 「100000年後の安全」  
マイケル・マドセン監督
  - \* 「内部ひばくを生き抜く」  
鎌仲ひとみ監督
- ・本&ブックレット
  - \* 「原発と憲法9条」 小出裕章著 (游絲社) 2012/1刊 1400円
  - \* わが子からはじまるクレヨンハウス・ブックレット ヒロシマから「内部被ばく」と歩んで 医師 肥田舜太郎 500円
  - \* 原発事故報道のウソから学ぶ〜市民が主人公となる社会のために 弁護士・ジャーナリスト 日隅 一雄 500円

福島原発が4基も爆発してしまっから1年半が経ちます。今年7月5日には、国会の事故調査委員会の報告書が出されて、多くのことが明らかになって来ましたが、去年3月12日には1号機、14日には3号機が水素爆発。15日、2号機水位低下により核燃料が崩れ落ち、放射能が大量に漏れ出した。4号機は運転していなかったで、爆発、炉心溶融は免れたのかと思っていたら、今、最も危険な状態なのは、4号機だということを知りました。

2012/8/31 衆議院第一議員会館 アーニー・ガンターセン(米国、原子炉エンジニア)講演

\* ICRP 本の核燃料が、格納されていない状態で、建屋屋上?のプールで冷却されており、建屋は崩落の危険もある。核燃料はシルカロイドの鞘に覆われており、水が抜けて崩壊熱が上昇したら水による冷却は不可。核燃料が大気中で燃えるという未曾有の事態になる。ガラス様の化学物質によってしか火災を止められない。地震が来ないうちに一刻も早く燃料棒を取り出さなければならぬ。にも拘らず、燃料棒を取り出すためのキャニスターは重量が100トンがあり取り出すためには巨大なクレーンが必要。燃料は強力な放射能を出して

いて、取り出し開始は2013年12月。(東電)

原発事故の問題を考えるとときに、横文字と数字が多くて、しろうとが理解し納得するのがとても難しいと感じています。例えば、内部被ばくについて、「心配しすぎ」「農産物などへの過剰反応を」風評被害」とする一方、晩発性の健康被害を未知の領域として、ヒロシマ・ナガサキの被ばくやチェルノブイリの被ばくに学ぼうとする考え方があります。必ずしも「基準」が一つでないのには、理由があるのだと最近知りました。

ICRP・・・国際放射線防護委員会と ICRP・・・欧州放射線リスク委員会との二つがあつて その思想とリスク基準が違ふ。ICRPの基準は原子力開発の経済的・社会的要因を考慮し、合理的に達成できる限り低く、という視点で算出。IAEAと連携。ICRPは1997年に結成された市民団体で ICRPの放射線被害評価モデルへの批判などから生まれた。

SPEEDIのデータを政府が隠した事によって、多くの人が避けられたはずの被ばくをしてしまいました。(浪江町など) テレビのニュースが「直ちに健康被害はない」と言っている間も、放射能は空気、大地、河川、海を汚染しました。去年の4月19日、文科省は、「校舎や校庭の利用判断のための基準を年間20

ミリシーベルト以下」と発表しました。「子どもは放射線の感受性が高いのに、大人とおなじとは?!」と疑問の声が上がり、社会的に大きな問題となったことをご記憶であろうと思います。

私は、今子どもたち、とりわけ福島の子どもたちへの低線量被ばくの影響が一番心配です。低線量被ばくは、いまなお続いているし、これから何が起こるか判りません。長期間にわたる内部被ばく(どんな核種をどのくらい体内に取り入れたか。例えば20年後にガンが発症したとして、原発事故による放射能が原因だと証明できない)による晩発性の健康被害の因果関係は未知です。だから、被ばくはできる限り避けなければならぬ。(医療被ばくも含めて)。

母乳、水、毎日食べるものの放射性物質の検出は、0でなければいけないと考えられています。(千葉市在住)

★暑い暑い夏でした。秋がくればすぐに年末。一年の大半が過ぎても被災地の復興は軌道に乗りません。政治の駆け引きばかりが目立つこの頃です。★支援バスの中で鎌倉さんの発言を文章にさせていただきました。★10月の講演会にはぜひお出かけください。お待ちしております。(近藤)